第39回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校1年生の部　最優秀賞

シートンの教え

弟子屈中学校　芝田　遥夏さん

「動物」それは私達人間とはとてつもなく違うところもあり、また共通性もある。今回私が読んだ本はそう語りかけてくるようだった。

私が読んだ本は「シートン動物記」。みなさんもご存じであろう有名な本である。この本は一見動物の生態だけを書きとめているようだがそうではない。その裏になにかを問いかけてくるような本だ。さらに動物の気持ちになって書いているものもある。私はその中で「人間」と関わりのあるものに夢中になった。

数年前、母が運転している車と雄ジカがぶつかった。後部座席に乗っていた私は、あの時の恐怖を今でも覚えている。また、牧草地で若草を食べてしまうシカを私はあまりよく思っていなかった。最近、シカが増えてそれを駆除しようとするニュースをよく見かける。私はそれを仕方のないことだと感じていた。

動物記の中の『サンドヒル雄ジカの足あと』という話は、そんな私に衝撃を与えた。この話は「シカ」を動く肉のかたまり、お金としか思っていなかった「猟師」の気持ちが描かれている。私がもし「猟師」だったら、きっとシカのことを自分の食料だと思って狩りをするだろう。そして、いつまでも追い続けてると思う。しかし、シートンの描いた猟師は違った。シカを追いつめ、完全に自分のものになるのに、すばらしい雄ジカを逃がしたのだ。私は今までずっと追ってきたシカを見逃していいのかと思った。しかしこの中で猟師は、「ぼくはこれまでオオカミのようにあらあらしい心でおまえのあとを追ってきたが、もう二度とそんなことはしないだろう。ぼくはこれまでおまえのなかまを、動く的か、肉のかたまりかだとばかり見ていたが、これからは、そういう見かたはしなくなるだろう。」と言っていた。私はこの意味を考えた。なぜシートンはこんなことを考え、書くことが出来るのだろうか。なぜこれを書こうと思ったのだろうか。私とシートンの考えが一致しているとは思わないが私はこう考えた。雄ジカは「命がけ」で逃げた。妻の雌ジカを殺されても一匹で逃げた。この必死さをきっと猟師はわかったのだと思う。動物は、知恵を使い命がけで人から逃げ、命を守っている。ということを、シートンは伝えたかったのではないか。

今まで人の手によって絶滅した動物は少なくはない。そのため増えすぎた動物もいる。きっとシートンは動物の生態を伝えるだけでなくその裏で、「野生動物の生態系を簡単に人間が壊していいのか」と言いたかったのではないか。この話を読んで、私はシートンの気持ちになれた気がする。

シートンは犬を飼っていた。その犬はビンゴ。オオカミみたいだ。ある日シートンがオオカミにおそわれそうになった時ビンゴはそれを助けたのだった。さらにビンゴは死ぬ時もシートンを求めた。そう考えるとビンゴは本当にシートンが好きだったのだ。シートンもまた、ビンゴを助けられなかったことを悔やんでいただろう。私がシートンだったら、最後には自分を求めてくれたビンゴにお礼を言いたい。

「必要としてくれてありがとう。」と。

以前私にも、好きな動物がいた。それは、家で飼っていたヤギだ。大好きで毎日草をあげていた。しかし突然たおれて死んでしまった。好きな動物が目の前からいなくなる。私はすごくさびしかった。また、私の家にいる牛、残さないと決めた牛は、市場でせり出され、お肉になる。このときは、家畜として育ってくれたうれしさと、いずれ肉になり命を失ってしまうさみしさで複雑な気持ちになる。しかし、それが人と家畜の関係であるなら、それを受けとめていかなければならない。

私は、このシートンのように動物に関わる仕事をしたいと思っている。そして、この本に出会って私の意志はさらに強くなった。私は動物が好きだ。好きなものの事について関わりながら仕事が出来るのは幸せだと思う。シートンは私に大切なことを教えてくれた。

書名『シートン動物記』
アーネスト・トムソン・シートン　著

（寸評）さまざまな動物との触れ合い、違い、共通点、そして生命の輝きに直面したシートンと共に、人間と動物の関係について具体的に再考することができています。そして、家畜としての動物というテーマについても、生命を尊重しながら共存していこうという決意にたどり着くことができました。自己の経験と先人の経験を重ね合わせながら思考を展開する芝田さんの、感性の豊かさを感じました。

■中学校2年生の部　最優秀賞

平和な世の中になるために

弟子屈中学校　山崎　美玖さん

私は小学生の時に、沖縄に家族旅行にいき、「ひめゆりの塔」へ初めて行きました。そこにはたくさんの遺品や写真、地下壕の再現ジオラマなどがあり、ガイドさんがいて色々説明してくれました。そのガイドさんはひめゆりの生存者の方でした。ガイドさんの話を聞いて、涙が出そうになったのを今でも覚えています。今回、読書感想文を書くにあたって「ひめゆりの沖縄戦」をあらためて読みかえしてみました。

この物語は、沖縄戦に散った女生徒達の悲劇を書いています。アメリカの大軍が沖縄への攻撃を始めた時、「ひめゆり」という名前をつけられた、沖縄師範学校や第一高等学校の女子部の生徒達は、全員日本軍の陸軍病院の看護婦部隊として、戦場にむかいました。戦争は激しさを増し、傷病兵たちが次々に病院に運ばれてきました。腕や足などがなかったり、顔は半分なかったりでした。それでも震えながら、歯をくいしばって傷病兵たちの手当てをしたといいます。このひめゆり部隊の中には、私と同じ十三歳の少女もいます。自分も死ととなり合わせなのに、ここまで一生懸命手当てをしたなんて、本当に言葉もありません。米軍に追われて、ついに沖縄最南端まで追いつめられ、ひめゆり部隊の生存者はほんのわずかだったそうです。

この本を読んで感じたことですが、今、私が平和な毎日を過ごせているのは、たくさんの方々が命を犠牲にして、今のこの平和な日本に変えてくれたからだと思います。

沖縄は日本本土で唯一、地上戦が行われた場所で兵士だけでなく、多くの住民の被害者が出たといいます。

今も普天間基地問題で沖縄にたくさんの犠牲をしいています。先日もオスプレイが普天間基地に追加配備されたり、米軍のヘリコプターが民家のすぐそばに墜落したり、沖縄の人達ばかりが今でも危険や、戦争の恐怖にさらされています。戦争はその時だけでなく、永遠に人の心を苦しめ、傷つけ続けるものだと思います。何ひとついいことのない戦争は、繰り返してもいいことは起きないし、絶対にしてはいけません。戦争で、深い傷をおった心は直すことはできません。

私はこの本を読むまでは大まかな部分しか戦争については知りませんでしたが、一個人の記憶や思いを読んで戦争について深く、様々なことを考えるようになりました。戦争を知らない年代の私たちこそがこういった本を一度は読んでおくべきだと思います。海外に目を向ければ戦争は今だになくなっていません。みんなが楽しく過ごせるような世の中になってほしいです。自分もそれに協力できるような存在になりたいです。

未来に第三次世界大戦が起こらないよう、戦争を知らない私たちも平和についての意見をしっかりと持って生きていきたいと思います。

書名『ひめゆりの沖縄戦』
―少女は嵐の中を生きた―
伊波　園子　著

（寸評）「ひめゆりの塔」を訪れた際のガイドさんの話や、『ひめゆりの沖縄戦』をひもとくことで、山崎さんが歴史の厚みの中で今の自分や世界を見つめる視点を獲得できたことがよく分かります。「戦争はその時だけでなく、永遠に人の心を苦しめ、傷つけ続ける」、「戦争を知らない年代の私たちこそがこういった本を一度は読んでおくべきだと思う」と世界の平和を希求する山崎さんの言葉に、勇気づけられました。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※生徒の学年は、コンクールが行われた平成25年度当時のものです。